

造型される“旅”——東下りと勅撰集——

今 関 敏 子

キーワード 旅 流浪 制度 文化 造型

要 旨

本稿では、勅撰集における東下り撰取を切り口に、旅は和歌というジャンルではいかに表現されてきたのかという問題の一端を考えてみたい。

時代や文化背景によって、旅のあり方、その表現の仕方は異なってくる。同時代、同質の文化背景に生きていても、場所や土地の捉え方は個人の感性によって異なるはずである。旅の表現は、多様性がその特徴となつて当然であろう。ところが、平安鎌倉期に焦点を絞れば、旅の表現に顕著なのは、多様性ではなく、類型性である。事実在即していると捉えられがちな紀行にさえ、類型表現が特徴的である。

類型表現は、歌枕という、都から地方の共通理解、美的把握が象徴的に示すように、都を絶対化する観念性に根ざしている。本来定着の場である都から移動する場合には、目的とコースがあつた。都は出発点であり帰着点である基軸として、

揺らぐことはない。これが、いわゆる制度的な旅である。

対極的に『伊勢物語』の東下りでは、主人公の昔男は、都を喪失して流浪する。すなわち、反制度的な逸脱として東下りは『伊勢物語』に造型された。しかし、東下りが勅撰集に撰取され、その表現が歌枕として定着していく過程で、その流浪の悲劇性は捨象されていく。和歌表現もまた新たな類型を生み出す。こうして旅の文化は醸成されていくのである。

一、はじめに

現代人にとって、旅とは、日常を離れた時空を味わう楽しみであり、心躍るものである。行く先が未知の土地であればなおのこと、多少の不安が入り交じった出発前の期待は大きい。旅立ちを決めた時点からすでに旅は始まっているようなものである。そして、旅が終り、日常に戻っても旅の余韻は残る。旅の思い出は、現実に生じる困難を乗り越える勇氣

を与え、平穩な日常生活に必然的に内包される単調な繰り返しの苦痛を癒すことも多いようである。しかし、このような現代の旅、旅に対する現代の日本人の姿勢は、歴史的・地域的にみると、普遍的とは言い難いように思われる。^①時代や文化背景によって、旅のあり方、旅の捉え方は異なってくるのである。

さらに、個人の背負っている背景、世界観、感性の違いによっても旅の受けとめ方は違ってくる。十人の旅人がいれば、十の旅がある。同じ場所を訪ねても様々な感慨、感想、感動があつて当然である。だからこそ、人によって好きな土地、好きな場所も異なってくるのである。従つて、それぞれが自由の旅を表現するならば、個性溢れる旅の記が多く出現するはずである。西欧、及び日本の近現代の旅行記にはその傾向が強いであろう。しかし、これは必ずしも古典にはあてはまらないのである。いずれのジャンルにもいずれのテーマの表現にも言えることであるが、古典の旅の表現にもまた、個人の感性よりも伝統という枠組みを先ず優先する傾向は根強い。

たとえば平安鎌倉期には、紀行文学にジャンル分けが可能なく、貴族階級・隠遁者の手になる作品群がある。言うまでもなく、これらは、旅する主体によって書かれる。ただし、旅の実情と、表現される旅とは必ずしも重ならない。現実の旅

そのものがそのまま文字に表現されているわけではない。古典作者にとつて、紀行は旅の同時報告でもなければ、事実の記録でもない。和歌や物語は類型表現があつて当然と捉えられているジャンルであろうが、事実即して書かれると認識されがちな紀行文学にすら、類型表現は顕著である。

類型表現は、まず、都を中心にした世界観^③から生まれる。都はすべてに優先する価値基準であり、文化の規範であつた。旅人は都を出発して都に帰る。旅は流浪ではない。旅には必ず目的があつた。また、定まったコースがあつた。紀行作者たちは歌枕を辿り、そこで詠歌するか、歌を詠まぬまでも故事に言及する。それは、一人の外国人の日本文学研究者に、
“歌枕を辿れば、家の中においても旅行記を書くことが可能”
とまで言わしめた^④、日本独特の紀行のあり方なのである。

和歌を含まぬ紀行はない。歌枕という、都を中心にした地方の美的把握が成り立つ和歌の伝統と、旅の表現は切り離せないのである。

本稿では『伊勢物語』と勅撰集の接点を切り口に、歌に詠まれる旅について考察してみたい。

二、勅撰集にみる『伊勢物語』摂取の概観

二十一代集中、『伊勢物語』に重なる旅歌が見出せるのは、

『古今集』『後撰集』『新古今集』『新勅撰集』である。旅の歌は羈旅歌だけではない。「別」「離別」も旅を表現した部立である。しかし、そこには『伊勢物語』に重なる歌は見出せない。『新勅撰集』にはもとより「離別」の部立はない。『伊勢物語』の旅を直接摂取しているのは、羈旅歌の部立のみである。

羈旅歌の歌数 重なる歌数と『伊勢物語』の段 計

| | | | | |
|------|-----|----------|----------|----|
| 古今集 | 16首 | 2首(九段) | 2首(八十二段) | 4首 |
| 後撰集 | 18首 | 1首(七段) | | 1首 |
| 新古今集 | 94首 | 1首(八段) | 1首(九段) | 2首 |
| 新勅撰集 | 46首 | 1首(八十三段) | | 1首 |

『伊勢物語』に重なる旅の歌はそう多くはない。勅撰集全体で8首。そのうち、4首を『古今集』が占める。わずか4首でも『古今集』の場合、羈旅歌全体数の割合をみれば、群を抜いて多い。羈旅歌の25%を占めていることになる。続いて『後撰集』1首。5集隔たり、『新古今集』2首、『新勅撰集』1首と続き、直接的な『伊勢物語』摂取は姿を消す。七、八、九段はいわゆる東下り、八十二、八十三段は、惟喬親王と馬頭の登場する狩の場面である。

全体の特徴として、『古今集』の詞書は長く、内容も『伊

勢物語』本文にほぼ忠実に重なるが、時代が下るにつれ詞書は簡略化される傾向を指摘し得る。『古今集』の『伊勢物語』摂取の数の多さと詞書の長さは、ひとつには、両者の制作年代が近いことに起因していよう。

『古今集』と『伊勢物語』の関連について片桐洋一⁵⁾は、「たとえば『古今集』恋三・六二二と『伊勢物語』第二五段の場合や、『古今集』雑上・八七一と『伊勢物語』第七六段の場合のように、『伊勢物語』がその増益の過程において『古今集』の歌を材料として採り込んだという場合もあるが、その逆に『古今集』恋五・七四七と『伊勢物語』第四段、あるいは『古今集』恋三・六三二と『伊勢物語』第五段の場合のように、『古今集』が既に形をなしていた原初形態の『伊勢物語』を素材に用いたとしか考えられない場合」があることを踏まえ、羈旅歌については、『古今集』が『伊勢物語』から収録したという見解をあきらかにしている。また、『伊勢物語』に重なる詞書が勅撰集にはふさわしくないことも、その根拠として指摘している。

勅撰集における旅の歌は『伊勢物語』から、何を採り、何を採らなかつたのか。時代が変遷すると、どのように変わっていくのか。

三、狩と勅撰集

まずは、惟喬親王と馬頭（業平）が、狩に行った折の交流からみていきたい。（以下、『伊勢物語』引用部の傍線部分は、勅撰集の詞書にない箇所である。また、勅撰集引用部の部分は『伊勢物語』と異なる箇所である。⑥）

《伊勢物語八十二段》

（上略）

子 敏 関 今
この酒を飲みてむとて、よき所をもとめゆくに、天の河といふところに至りぬ。親王に馬頭大御酒まゐる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたるを題にて、歌よみて杯はさせ」とのたもうければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らし柵機津女に宿からむ

天の河原に我は来にけり

親王、歌をかへすがへす誦じ給うて、返しえし給はず。紀の有常御供に仕うまつれり。それが返し、

一とせにひとたびきます君までば

宿かす人もあらじとぞ思ふ

（後略）

《古今集羈旅》

惟喬親王の供に狩りにまかりける時に、天の河と

いふ所の河のほとりにおりゐて酒など飲みける
ついでに、親王のいひけらく、狩りして天の河原にいたるといふ心をよみて杯はさせといひければよめる

在原業平朝臣

418 狩り暮らし柵機津女に宿からむ

天の河原に我は来にけり

親王この歌を返す返す読みつつ返しえせずなりに

ければ、供に侍りてよめる

紀有常

419 一とせにひとたびきます君までば

宿かす人もあらじとぞ思ふ

『古今集』の詞書に地名が記されていない他は、ほとんど内容的に一致する。

《伊勢物語八十三段》

むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王、例の狩し

におはします供に、馬頭なる翁つかうまつれり。日ご

ろへて宮にかへり給うけり。御送りしてとく去なむと

思ふに、大御酒たまひ祿たまはむとて、つかはさざり

けり。この馬頭、心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ

秋の夜とだに頼まれなくに

とよみける。時は三月のつごもりなりけり。親王大殿

籠らであかし給うてけり。

《新勅撰集 羈旅歌》

惟喬親王の狩りしける供に日ごろ侍りて、かへりて侍りけるを、猶とどめ侍りければよみ侍りける

業平朝臣

538 枕とて草ひき結ぶこともせじ

秋の夜とだに頼まれなくに

『新勅撰集』は『伊勢物語』に比しても『古今集』に比しても、詞書が簡略である。ただし、表現は異なっても『伊勢物語』の内容が『新勅撰集』で変わってしまうということはない。

水無瀬や交野の地名は『古今集』『新勅撰集』にはないが、京都近辺の逍遙が勅撰集で羈旅歌に分類されるのは、旅というものの範囲の広さを示しているよう。当時、定住の地、常の居場所である家を離れることは、遠近を問わず旅であった。

八十二、八十三段の後代への影響は、比較的稀薄である。とりわけ、惟喬親王と紀有常、業平の交流に関する踏襲は見出し難いのである。「天の河」の語例だけなら、『後撰集』に見出せる。

・後撰集 離別 羈旅

舟にて物へまかりける人につかはしける 伊勢

1345 おくれずぞ心にのりてこがるべき

浪にもとめよ舟みえずとも

返し

よみ人しらす

1346 舟なくは天の河までもとめてむ

こぎつつしほのなかにきえずは

土佐より任はててのぼり侍りけるに、舟のうちに

て月を見て

つらゆき

1363 てる月のながるる見れば天の河

いづるみなどは海にぞありける

とりわけ『伊勢物語』『古今集』における天の河の贈答のおもしろさは、織姫に宿を借りるという趣向にあったが、『後撰集』の例は全く『伊勢物語』の歌の趣向とは無縁である。

ただし、1例のみ、「すみだ河」を詠んだ歌に「天の河」の趣向と、「枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくに」を生かしているとおぼしい後代の享受が見出せる。

・新後拾遺集 羈旅歌

題しらす

祝部尚長

895 わがためは結びもおかぬいほさきの

すみだ河原に宿やからまし

何と言つても、『伊勢物語』で中心になっているのは、逸脱した皇統・惟喬親王と臣下の交流である。物語の主人公

(業平Ⅱ馬頭) も皇統の血をひく。主流から外れた現実を共有するがゆえになおの事、付き随っている紀有常も業平も親王に寄せる敬慕の念は深く、狩の思い出は忘れがたい。八十二、八十三段は、逸脱の皇統の物語、中心から排除された人間の物語と言い得るのである。このテーマはほとんど勅撰集の羈旅歌には反映されていない。『古今集』では、その長い詞書と物語が相俟って、直接表出されていないものも多少は享受者に伝わったかも知れない。が、時代が下るとさらに『伊勢物語』に顕著な、中心からの逸脱という悲劇性は、捨象されていく。勅撰集の旅の歌に関しては、逸脱の悲劇性を匂わせるものが『伊勢物語』から踏襲される事はなかったのである。

四、東下りと勅撰集

『伊勢物語』と重なる勅撰集羈旅歌で注目すべきは、何と言つても東下りである。以下、検討していく。

I 『伊勢物語』七段・八段と勅撰集

(1) 七段と後撰集

まず、『伊勢物語』七段、八段と勅撰集に重なる箇所。

《伊勢物語七段》

むかし、男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいとしろくたつを見て、

いとどしく過ぎゆくかたの恋ひしきに

うらやましくもかへる浪かな

となむよめりける。

《後撰集 離別 羈旅》

東へまかりけるに、過ぎぬる方恋ひしくおぼえ

けるほどに、河をわたりけるに 浪のたちけるを

業平朝臣

1352 いとどしく過ぎゆくかたの恋しきに

うらやましくもかへる浪かな

『後撰集』詞書に、「京にありわびて」という「旅人の事情」

はない。さらに、大きく変更されているのは、「伊勢、尾張のあはひの海づら」が「河」となっていることである。また、『後撰集』では、『伊勢物語』の浪が「白く」立っていた描写はなく、『伊勢物語』にはない表現「過ぎぬるかた恋しくおぼえけるほどに」がみえ、過去への懐旧の念を強調する。

「いとどしく…」歌は、都からの空間の隔たりと、過ぎ行く時間の隔たりを詠んでいる。喪われた時空は取り戻せないのに、往復運動を繰り返す波の羨ましいことよという趣である。この趣向が盛んに踏襲された形跡はないが、かなり時代

が下ると次の歌がある。後述する「宇津山」をあわせた趣である。

・新拾遺集 羈旅歌

題しらず

平行氏

835 うき枕結びもはてぬ夢路より

やがてうつつに かへる波かな

(2) 八段と新古今集

《伊勢物語八段》

むかし、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住みどころ求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽に立つけぶり

をちこち人の見やはとがめぬ

《新古今集 羈旅歌》

東のかたにまかりけるに、浅間の嶽にけぶりの立つを見てよめる

業平朝臣

903 信濃なる浅間の嶽に立つけぶり

をちこち人の見やはとがめぬ

『新古今集』の詞書は、実に簡略である。既に掲げた『後撰集』の七段撰取に共通して、京に住みにくくなった旅人

の事情”と、東国に居場所を捜して一人二人の友と行ったという“流浪性”が捨象されているのである。

II 『伊勢物語』九段と勅撰集

九段と、勅撰集をみよう。主人公の行程に従い、八橋、宇津山、富士山、角田河の順に検討する。

(1) 八橋

《伊勢物語》

むかし、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらず、東のかたに住むべき国求めにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるにやりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげに下り居て、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣きつつなれにしましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひの上に涙落してほとび

にけり。

《古今集 羈旅》

東のかたへ友とする人ひとりふたり **いざなひて**

いきけり、三河の国八橋といふところのいたれりけるに、その河のほとりにかきつばたいとおもしろく咲けりけるを見て、木のかげにおりて、かきつばたといふ五文字を句のかしらにすゑて **旅の心をよまむ** とてよめる 在原業平朝臣

410 唐衣きつつなれにしましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

子 敏 関 今

『古今集』詞書で省略されている『伊勢物語』の内容は次の通りである。

i 京には己の価値を見出せず、居場所を東国に求めた、という“旅人の事情”

ii 道を知る人もなく、迷いつつ行った、という“旅のあり方”

iii 蜘蛛手に流れる川に八つ橋を渡した、という八橋の“地名の由来”

iv 川辺の木陰で乾飯を食べた、という“ものを食べる行為”
v 歌に感動して人々が泣いたこと。乾飯がふやけたこと。

すなわち“歌の影響・効果”

一首の歌に対する人々の反応（v）は、歌物語では重要な

歌の力、歌の効果をあらわすと考えられる。この点については、角田河を検討する際に再び触れることにする。

『古今集』で何よりも注目すべきは、旅する主体の動機

(i) と旅のあり方 (ii) の省略である。『伊勢物語』の主人公である男は悲劇的状况で旅をしている。この世に自身が身を置くべき場所がないと思い、都を後にする。「もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり」（伊勢物語）は、心細さの表明だが、『古今集』の「友とする人ひとりふたり **いざなひて** いきけり」という表現には、旅の道連れという

以上の悲劇的状况は読み取りにくいだろう。ここには、愁いや悲しみという旅人の心情は投影されていない。もとより『伊勢物語』に表出されている昔男の旅は、帰る場所のない、居場所捜しの旅である。しかもコースが定まっているわけではない。迷いつつ、心細い旅を続け、東に下っていく。

言うまでもなく、そこには、これらの状況が、勅撰集の和歌の詞書としてふさわしくない、という判断が働いていると思われるが、『古今集』が取り入れなかった『伊勢物語』の重要な要素は、旅の“流浪性”である。

ちなみに、二十一代集の旅の歌に「八橋」の語例は4例。

・拾遺集 別

源のよしたねが三河のすけにて侍りけるむすめの

もとに、母のよみてつかはしける

赤染衛門

317 もろともにゆかぬ三河の八橋は

恋しとのみや思ひわたらん

・玉葉集 旅歌

三河の国八橋をとほるとて

安嘉門院四条

1184 ささがにのくもであやふき八橋を

夕ぐれかけてわたりかねぬる

・新拾遺集 羈旅歌

題しらず

前大納言為家

810 旅衣はるばるきぬる八橋の

むかしの跡に袖もぬれつつ

・新続古今集 羈旅歌

いときなく侍りし時親に具して東に下りけるに、

三河の八橋といふ所にてよみ侍りける

978 八橋を行く人ごとにとひみばや

くもでにたれを恋ひわたるぞと

勅撰集歌の「八橋」の特徴は、実景歌・実詠歌が多いこと

であろう。『拾遺集』『新拾遺集』には、遠い距離を来たこと、

恋しい人がそばにいない寂しさが踏襲される。また、『古今

集』では省略されている「蜘蛛手」という「八橋」の地形が

踏襲されているのは、後代の享受が『伊勢物語』に叙述され

る状況を踏まえていることを示唆しているよう。

「八橋」に関連して、「唐衣」の用例はきわめて多く、二十

一代集の旅の歌に14例を数えるが、『伊勢物語』の筋を踏まえるものは次に示すわずか1例である。

・新拾遺集 羈旅歌

前大納言為家

白川殿七百首歌に、旅宿時雨

804 唐衣はるばるきぬる旅寝にも

袖ぬらせとや又時雨るらん

これ以外の13例は、『伊勢物語』に重なる内容とは言いがたい。むしろ、「衣」「旅衣」の用例に「はるばる」と相俟って『伊勢物語』的情趣を醸し出しているものを見出せる。

・新千載集 羈旅歌

(嘉元百首歌たてまつりける時・旅)

おなじ心を

津守国助

791 旅寝する衣の関をもるものは

はるばるきぬる涙なりけり

道誓法師

792 旅衣はるばるきてもへだてぬは

都にかよふ心なりけり

貞和百首歌たてまつりし時

前大納言為定

793 旅衣なれはまさらぬ道なれば

はるばるきても踏みまよひつつ

勅撰集が「八橋」から摂取したのは、都より遙か遠くまで来たという思いと、恋しい人の残る都を思う望郷、郷愁の念

であると言い得よう。

(2) 宇津山

《伊勢物語》

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、
わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂
り、もの心ほそく、すずるなるめを見ることと思ふに、
修行者あひたり。「かかる道はいかにかいまする」とい
ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとに
とて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも

夢にも人に逢はぬなりけり

《新古今集 羈旅歌》

駿河の国宇津の山にあへる人につけて、京につか
はしける
業平朝臣

904 駿河なる宇津の山辺のうつつにも

夢にも人に逢はぬなりけり

『新古今集』では、『伊勢物語』に述べられる詠歌状況は見
事に捨象されている。「ゆきゆきて」という、遠い距離を歩
き続けるという表現、「宇津の山にいたつてみると、細く暗
い道に蔦楓が生い茂り、心細く、恐ろしい目に会いはしない
か」と思っていると、山伏に会い、知り合いであった、そこで、

京への文を託した」という状況の記述はない。旅の困難さ、
心細さの表出が、『新古今集』にはない。

ちなみに、「宇津山」が、二十一代集の羈旅歌に詠まれる
のは、まさしく、『新古今集』以降（16例）であることは注
目されよう。それ以前には、旅の歌として「宇津山」を詠み
込んだ歌が載ることはなかった。『新古今集』が『伊勢物語』
九段を採りこんで後、定着した様相である。しかもほとんど
は題詠である。

・新古今集 羈旅歌

和歌所にて、をのこども旅の歌つかうまつりしに

家隆朝臣

981 旅寝する夢路はゆるせ 宇津の山

せきとはさかずもる人もなし

詩を歌に合せ侍りしに、山路秋行といへることを

定家朝臣

982 宮こにもいまや衣を 宇津の山

夕しも払ふ 蔦の下道

鴨長明

983 袖にしも月かかれとは契りおかず

涙は知るや 宇津の山 越え

・続古今集 羈旅歌

後鳥羽院に名所歌たてまつりける時

参議雅経

915 ふみわけし昔は[夢]か[宇津の山]

あととも見えぬ[蔦]の下道

・新後撰集 羈旅歌

旅歌の中に

藤原範重朝臣

578 こよひかくしをるる袖の露ながら

あすもや越えん [宇津の山]道

・玉葉集 旅歌

[宇津の山]にて

中務卿宗尊親王

1133 しげりあふ[蔦]も[楓]も紅葉して

こかげ秋なる [宇津の山]越え

・新千載集 羈旅歌

正治二年百首歌たてまつりける時、旅前大納言忠良

818 嵐ふくたかねの雲をかたしきて

[夢]路も遠し [宇津の山]越

・新拾遺集 羈旅歌

旅のこころをよませ給うける 入道二品親王尊円

818 都おもう [宇津の山]道越えわびぬ

[夢]かとたどる心まよひに

東よりのほりける道にて

法印定円

819 露しげき [蔦]のしげみを分越えて

岡べにかかる [宇津の山]道

・新後拾遺集 羈旅歌

旅行の心を

堯尋法師

877 里まではまだはるかなる [宇津の山]

夕ゐる雲に宿やとはまし

題しらず

藤原政宗

878 あげば又ひとりやゆかん夜もすがら

月に友なふ [宇津の山]越

式子内親王

879 おのづからあふ人あらばことづてよ

[宇津の山]べを越えわかるとも

・新続古今集 羈旅歌

左大臣富士見侍らむとて東に下り侍りし時、おな

じくまかり下りしに、宇津の山を越え侍るとて、

参議雅経ふみわけし昔は夢か宇津の山とよみける

ことを思ひいでて

権中納言雅世

952 昔だに昔といひし [宇津の山]

越えてぞ忍ぶ [蔦]の下道

家にて歌合し侍りける時、蔦を

後京極撰政前太政大臣

953 [宇津の山]越えし昔の跡ふりて

[蔦]の枯れ葉に秋風ぞ吹く

題しらず

法印宋親

954 都にやことづてやらむ旅衣

日も夕ぐれの **宇津の山** 越え

守覚法親王家五十首歌に

従二位家隆

959 **宇津の山** 月だにもらぬ **蔦** のいほに

夢 路たえたる風の音かな

興味深いことには、『続新古今集』以降、『新古今集』の詞書では省略された「蔦」「楓」、小暗い山道が詠まれるようになり、『伊勢物語』享受が定着していたことを示唆している。

(3) 富士山

《伊勢物語》

富士の山をみれば、五月のつごもりに、雪いとしろ
う降り。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重
ねあげたらむほどして、なりはしほじりのやうになむ
ありける。

ここは、地の文も和歌も、都人にとっては珍しい富士山の
形、地形が記述されている。

勅撰集の旅歌に、『伊勢物語』に重なる富士山は見当た
らない。

(4) 角田河

《伊勢物語》

なほゆきゆきて、武蔵の国と下総の国との中に、い
とおほきなる河あり。それを角田河といふ。その河
のほとりにむれるて、「思ひやれば、かぎりなく、
遠くも来にけるかな」と、わびあへるに、渡守、
「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」といふに、乗りて渡
らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人
なきにしもあらず。さる折しも、しろき鳥の嘴と脚
とあかき、鳴のおほきさなる、水のうへに遊びつつ
魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。
渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞き
て、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥

わが思ふ人は在りやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

《古今集 羈旅》

武蔵の国と下総の国との中にある角田河のほとり
にいたりて **都のいと恋ひしうおほえければ**、し
ばし河のほとりにおりて、思ひやればかぎりな
く遠くも来にけるかなと **思ひわびてながめをる**
に、渡守、はや舟にのれ、日暮れぬといひけれ

ば舟に乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さるをりにしるき鳥の嘴と足とあかき河のほとりに遊びけり、京には見えぬ鳥なりければみな人見知らず、渡守にこれは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひけるをききてよめる

41名にしおはばいざこと問はむ都鳥

わが思ふ人は在りやなしやと

内容的には、ほとんど一致する撰取である。「なほゆきゆきて」という長い行程を経た事情が『古今集』詞書にはない。『伊勢物語』の「わびあへる」は、旅の道連れと共感する表現としては『古今集』詞書「思ひわびてながめをる」より強いでであろう。『古今集』では角田河の地形的説明「いとおほきなる河なり」が省略され、『伊勢物語』にはなかった「都のいと恋ひしうおほえければ」が付加され、望郷という旅人の心情を強調している。

さらに、既に触れた「八橋」同様、『古今集』詞書には、『伊勢物語』に顕著な「歌の影響・効果」で、人々が泣いたという記述がない。八橋では、「唐衣…」歌に感動し、旅人たちが涙を落として、乾飯がふやけてしまう。角田川では、「名にしおはば…」歌に舟中の人々が泣いたというのである。歌にはそれほどの力があつた。まさしく歌物語『伊勢物語』

は、歌の効果で物語が展開していく。たとえば、恋は、恋人たちの詠む歌によって、その恋のありよう、行く末が読者に伝わるのである。

歌に感動して泣くのは、人々が同じ思いを共有しているからである。人々の心の奥にあるものを、歌が呼び覚ましたのである。それは望郷の念であり、都に向ける眼差しである。都を遠く離れていることの孤独と悲哀である。人々が共感するのは、このような旅人の心情である。ただし望郷ならば、『古今集』も強調している。物語と勅撰集はいかに違うのか。

そもそも、『伊勢物語』に表出されるのは、一般的な当時の旅ではなかった。物語の歌に詠みこまれているのは、定住の場である都へ帰ることが前提の、定まったコースを辿る旅人の心情ではない。都を喪失した男の歌だからこそ効果があつた。人々を衝き動かす歌は、特殊な事情の旅人、昔男の詠歌でなければならなかった。二度と帰る当てのない都への望郷の念であればこそ、その悲哀は深い。『古今集』ではこのような逸脱の面は捨象されてしまう。

角田河に関連した後代の詠歌を挙げる。

・後拾遺集 羈旅

和泉に下りはべりけるに、よる都鳥のほのかに
鳴きければよみ侍りける
和泉式部

509 こと問はばありのまにまに都鳥

都のことをわれにきかせよ

・新古今集 羈旅歌

伊勢より人につかはしける

女御徽子女王

908 人を猶うらみつべしや **都鳥**

在りやとだにも問ふをきかねば

述懐百首歌よみ侍りける旅の歌

宜秋門院丹後

977 おぼつかかな都にすまぬ **都鳥**

こと問ふ一人にいかが答へし

・新勅撰集

題しらず

弁基法師

501 まつち山ゆふ越えゆきていほさきの

角田河原にひとりかも寝む

久安百首歌たてまつりける旅の歌

皇太后宮大夫俊成

519 わが思ふひとに見せばやもるともに

角田河原の夕暮の空

・続古今集 羈旅歌

三百首歌の中に、都鳥を

太上天皇

935 **都鳥**なにごと問はん思ふ人

在りやなしやは心こそ知れ

弘長二年たてまつりし百首歌中に、河を

中務卿親王

936 このさとは**角田河原**もほど遠し

いかなる**鳥**に都問はまし

百首歌に、旅の心を

道円法師

937 思ふ人在りやと問へば**都鳥**

ききも知られぬ音をのみぞ鳴く

・新後撰集 羈旅歌

題しらず

法印清誉

593 **都鳥**いく世かここに**角田河**

ゆききの人に**名**のみ問はれて

・玉葉集 旅歌

嘉元百首歌の中に

後二条院権大納言典侍

1148 こと問へど答へぬ月の**角田河**

都の友とみるかひもなし

・新拾遺集 羈旅

羈旅の心を

皇太后宮大夫俊成

765 **角田河**故郷思ふ夕暮に

涙をそふる**都鳥**かな

百首歌めされし次に、

御製

766 限なく遠くきにけり**角田河**

こと問ふ鳥の名をしたひつつ

旅人が現実には角田河まで行き、都鳥に会うということとは稀であったに相違ない。「角田河」「都鳥」は盛んに題詠のなか

に詠まれた。そこで中心になるのは、都を恋うる望郷の思いであった。さらには、角田河とは無縁に、「都鳥」、「こと問ふ」のみが採られる例も見出せるのである。

Ⅲまとめ

以上、『伊勢物語』と勅撰集に重なる歌、及び詞書を検討してきた。

旅の歌は叙景歌が多いという先入観がもたれがちかも知れぬが、『伊勢物語』撰取で重要なのは旅人の心情表現であろう。

富士山が勅撰集に採られなかったのは、地の文も歌も地形の説明に終り、望郷の思い、旅の心情が述べられてはいないからであろう。この点は八橋の地名の説明が『古今集』にはないことと関連していよう。

当然のことながら、勅撰集には、歌に対する人々の反応はない。『伊勢物語』では、“歌の影響・歌の効果”が示されるが、これこそが、歌物語の醍醐味であろう。東下りは、地名とそれに付随する「かへる浪」「唐衣」「かきつばた」「蜘蛛手」「都鳥」といった旅の風物をも取り込んで歌枕として定着していった。

それらは、言うまでもなく、言葉の撰取にとどまらない。『伊勢物語』に読みとれるある種の情趣を包み込んでいる。それは主として、旅人が、思う人のいる都へ向ける望郷の念

であり、過ぎ去った時間と空間の距離である。

一方、勅撰集には決して採られなかった東下りの一面がある。それは、『伊勢物語』に特徴的な“流浪”の要素であり、流浪に伴う疎外感が織りなす悲哀と孤独であった。

五、旅の造型

I 和歌と紀行

旅の経験の有無に関わらず、旅の歌は詠める。現実の旅をして、実景を目の前にしても、それぞれに独自なはずの個人の感動、感慨が直接に表現されることは紀行に於いても稀である。紀行の表現には類型があった。まずは、その土地にまつわる故事や歌枕を踏まえる。伝統を尊重し、そこに趣向が凝らされる。個人的な感慨は趣向に内包される。理論上、歌枕を辿れば動かなくとも紀行が書けるという表現構造は、さらに顕著に旅の歌そのものの特質にあてはまるだろう。

時代が下るほど、勅撰集の羈旅歌には、実景歌より題詠歌が増加する傾向を安田徳子が指摘している。題詠が増えればなおいっそう、旅の表現は、一種の制度的枠組みの中の造型となる。歌枕は都で醸成された地方の美的把握であり、都からみた地方の共通理解であり、多分に観念的な伝統であった。人々は伝統に自己を一体化させ、言葉で構築した旅作りをし

てきたと言っても過言ではあるまい。

和歌を必ず含む紀行にも『伊勢物語』の影響は多く見出される。東下りは確実に、旅の詠歌の枠組みとして機能したものである。

II 物語と勅撰集

さてまた、物語、説話、伝承に見出される旅がある。このような旅は、紀行に表現される旅とは質を異にする。旅する主人公は劇的に流離の憂き目をみる。業平とおぼしき男の東下り、光源氏の須磨流謫、小町の零落と流浪と横死の伝承はその典型であろう。彼らはあてどなく流浪する。そこには、定まったコースもなければ、都へ帰還できるあてはない。ここが、旅する主体によって書かれる紀行の旅とは大いに異なるところである。ただし、悲劇の源は、都を追われたこと、都を喪失したことであって、都が絶対的な価値をもつことに変わりはない。しかしながら、定まったコースを辿らず、居場所を失って流離する旅の主体が自らの旅を語ることはない。流離の悲劇は第三者によって造型されるのである。

かなり忠実に『伊勢物語』を採取したと考えられる『古今集』にさえ、影をひそめてしまうのは、『伊勢物語』の旅の主体の、疎外された状況、その悲劇性、流浪性である。

物語では当然、三人称で、主人公の旅は語られる。一方、

勅撰集では、旅（たとえ想像上の旅であっても）する主体が旅を表現しているのである。従って、『伊勢物語』と同じ歌でも勅撰集に載った途端、歌と旅の質は変わってしまう。反制度的な「流浪」は、制度的な「旅」へと変容する。どのように旅路が困難であろうと、望郷の念、悲哀がであろうと、都を出て都へ帰るはずの定まったコースを歩む「旅」は「流浪」とは一線を画するのである。

制度から排除され、疎外されて流浪する昔男は自らの旅を語らない。物語の語り手は、昔男が都にいられなくなった要因は、反制度的な色好みの果てであることをほのめかしている。だからこそ、『古事談』や『無名抄』に載る説話―后がねである藤原高子との秘密の恋が発覚して髻を切られ、都にいられなくなった―が後世に伝承される。都を追われ、道もわからぬのに、東国へ居場所探しに出かける流離は、いわゆる紀行に書かれるような枠組みに収まる旅ではなかった。

勅撰集が『伊勢物語』から受け継いだものは、都へ向ける眼差しと旅人の孤独な心情であった。それは、都を喪失した流浪の悲劇ではない。あくまでも都が出发点であり帰着点である事が前提の、旅の類型表現の枠を出ないのである。

六、おわりに

(教授 日本文学)

『伊勢物語』の東下りは、旅の歌の伝統に大きく関与し、ひとつの方向性を示したと言い得よう。それは、流離の悲哀を捨象し、また、惟喬親王と馬頭の零落の予兆も捨象して定着していく。確かに、実詠から題詠へと、旅の歌は大きく変遷していくが、文学的次元に造型されていく旅の歌の基軸はそれほど大きくは動かないように思われる。

旅をする主体が自らの旅を書くにしても、旅が第三者によって創作され、伝承されるにしても、文学的次元の旅として「造型された旅」を人々は享受し、その情趣、伝統を味わい、旅の文化を作り上げていった、という面は看過できないだろう。とりわけ、鎌倉期以降、東国と京の間の交通・交易が盛んになり、前時代に比べ、往来は増えたが、それでも遠距離になればなる程、現実に旅をする人の割合は、現代に比べればはるかに低い。旅する人がそう多くはなく、情報手段が少なかったということも、独自の旅文化が形成される土壌であろうと思われる。〴〵かくあるべき旅”の情趣を表現する恰好の手段として、歌枕のイメージは、伝統を踏まえつつ実景とは別に膨らんでいく。こうして類型表現が確立していく。東下りはこのような旅の文化の醸成におおいに貢献したと言いつても得るだろう。

① 注

たとえば、平安鎌倉期の旅の表現に関しては、紀行文にせよ、和歌にせよ、出発を手離して喜ぶという姿勢はない。往路は都を離れることを躊躇し、悲しみ、旅の途中は望郷の念が去らず、帰路には都に近づくことを喜ぶのである。このような表現類型がある。

②

鎌倉期以降には、男性作者の紀行が増える。女性作者の場合、紀行が独立して綴られることはほとんどない。自己の人生をある時点で振り返って執筆する日記文学の中に意味ある体験として紀行が書きとめられる。そもそも、最初の仮名日記『土佐日記』の内容は船旅であった。『更級日記』『うたたね』『十六夜日記』『とはすがたり』は、旅が重要な意味を持つ日記作品である。

③

今関敏子「旅」の表現と虚構——中世女流日記を中心に——(中世文学第39号1994・6)で歌枕・都が基点の姿勢について指摘した。

④

H・E・プルチョウ『旅する日本人 日本の中世紀紀行文学を探る』(武蔵野書院1983)を引用しておく。
由緒ある歌のイメージや「歌枕」を重視する日本の紀行は、距離・費用・宿の質や食物、そして船の便に関する情報などを含むヨーロッパの参詣記とは大きく違っており、むしろフィクションの世界に属するものであった。それゆえに日本の紀行は形式と内容が伝統に忠実であれば、たとえ現実に旅にかけなくても、家で想像上の旅行記を書くことは決して不可能なことではなかったのである。(270頁)

⑤ 『古今和歌集全評釈』（中）講談社1998（157頁）
『伊勢物語』の引用は、新潮日本古典集成『伊勢物語』（渡辺
実校注）に拠る。勅撰集は『新編国歌大観』に拠るが、『伊勢
物語』と比較しやすいように、適宜私に表記を変えて引用す
る。

⑦ 逸脱の悲劇性が勅撰集の羈旅歌に皆無という意味ではない。た
とえば、『古今集』羈旅歌の第1首に安倍仲麻呂歌「天の原ふ
りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」（四〇六）、続
いて小野篁歌「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げ
よ海人の釣舟」（四〇七）が掲載されている。『伊勢物語』撰取
について言えば、その顕著な特徴である逸脱性、流浪の悲劇性
が捨象されているのである。

⑧ 「唐衣」が詠まれるのは羈旅歌だけではなく、離別も多い。1
3首の内訳は、古今集 離別（1首）、後撰集 離別 羈旅
（4首）、拾遺集 別（3首）、続後撰集 羈旅歌（2首）、続千
載集 羈旅歌（1首）、続後拾遺集 離別（1首）、新後拾遺集
離別歌（1首）となる。

⑨ ④に同じ。

⑩ 『中世和歌研究』（和泉書院1998）第一章、第一節「旅歌
の変遷」参照。